



TITLE:

「水王」の系譜: スレイ・サントー
王権史

AUTHOR(S):

北川, 香子

CITATION:

北川, 香子. 「水王」の系譜: スレイ・サントー王権史. 東南アジア研究
2000, 38(1): 50-73

ISSUE DATE:

2000-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56738>

RIGHT:

「水王」の系譜 ——スレイ・サントー王権史——

北 川 香 子*

History of the Water Kings in Srei Santhor

Takako KITAGAWA*

Little attention has been given to the kings of Srei Santhor who appear in the Cambodian royal chronicles, because the Post-Angkor period has been portrayed as comprising only one dynasty and the Srei Santhor kings as temporary rebels. This article aims to explain the existence of the Srei Santhor royalty by using some historical materials and the results of field research.

Srei Santhor of the 16th century was a relay point connecting the Cam, Malay, Chinese, Spanish and Portuguese to the territory of the Lao via the Mekong route. In the late 17th century, Srei Santhor kings cooperated with Chinese who settled at the mouth of the Mekong, and competed with the kings of Udong.

The Japanese Kaihentai refers to the Srei Santhor kings as Mizu O, Water Kings. Furthermore, I found an oral tradition remaining in the region of Srei Santhor, in which Sdec Kon is referred to as a king protected by Naga. This probably symbolizes the Water Kings at the height of their prosperity.

The Srei Santhor royalty collapsed in the face of the Vietnamese advance to the Mekong, and in the subsequent royal chronicles of the rival Udong dynasty the water kings were referred to as rebels.

はじめに

17世紀後半以降のカンボジア史に関する研究は、王族を二分した内乱と、それに対するシャム、ベトナムの軍事的干渉を時系列に沿って整理することに集中してきた[13; 14; 15; 27; 28]。しかしながら、正統王がトンレ・サープ Tonle Sap 水系西岸に勢力基盤を持ち、反乱の首領とされる王族がメコン Mekong 河の東岸に勢力基盤を置いていた事実は、全く見過ごされてきた。年代記の記述を遡ってみると、反乱の拠点がメコン東岸に置かれたのは17世紀後半が初めてではなく、14世紀末～15世紀初頭以来、メコン東岸のスレイ・サントー Srei Santhor 地域に都を置いた王が5人確認できる。① ポニェ・ヤート Poñea Yat, ② スレイ・ソリヨテイ Srei Soriyotey, ③ スダチ・コーン Sdec Kon, ④ プレア・リエム・チューン・プレイ Preah

* 3-9-1-403, Kotesashi-cho, Tokorozawa, Saitama 359-1141, Japan

Ream Coeng Prei, ⑤ ウパヨリエチ・アン・ノーン Uphayoreac Ang Non である。ポスト・アンコール史の通説では、一系の王朝が、① バサン Basan (スレイ・サントー) → ② チャット・モック Cato Muk (プノンペン Phnom Penh) → ③ ロンヴェーク Longvek → ④ ウドン Udong と遷都したことになっている [20]。そして、スレイ・サントーに立った 5 王のうち、バサンのポニェ・ヤートだけが正統王とされ、それ以外は一時的な反乱者に過ぎないと見なされて、積極的な研究の対象とはならないできた。しかし、反乱の拠点が常にスレイ・サントーであったということは、正統王に対抗する勢力が拠って立つことのできる基盤が、この地域に存在した可能性を示唆する。本論では、(1) スレイ・サントーに基盤を置く勢力が実在したのか、(2) 実在したとすればいかなるものであったのかを論証し、従来のポスト・アンコール史において、王族の内紛とシャム・ベトナムの干渉という観点からのみ捉えられてきたものが、地理的に立地が異なる 2 つの勢力圏の抗争という側面も持っていたことを示す。

本論で使用する文献史料には、新発見のものはない。一系王朝史という先入観を排除した場合、従来の史料がいかに読み直せるかということを示す。主史料はカンボジアの王朝年代記、ボンサワダー Bansavatar であり、筆者が入手し得た次の 4 種類を用いる。① ガルニエ訳 [7] : 1818 年 3 月 19 日に、アン・チャン Ang Cand 王がオクニャ・ヴォンサー・サラベチ・ノン Ukaña Vansa Sarbejñ Nan に編纂させた版を、ドゥダール・ド・ラグレ Doudart de Lagrée がフランス語訳し、1871-72 年にフランシス・ガルニエ Francis Garnier が出版したものである [15: 9-10]。② バンコク写本 [4] : 1878 年 3 月 19 日、ヌバラット Nabbaratn 王子が編纂した版である [15: 13]。筆者が使用するの、バンコクの国立文書館に所蔵されていた写本であり、上智大学の石澤良昭教授の御好意でコピーを入手した。¹⁾ ③ ムーラ訳 [17] : 少なくとも 1869 年以降に編纂された編者不明の年代記を、ジャン・ムーラ Jean Moura がフランス語訳し、1883 年に出版したものである [15: 13-14]。④ VJ 写本 [3] : 1903 年 3 月 27 日、ノロドム Narottam 王がオクニャ・ヴェアン・チュオン Ukaña Vamn Juon を首班とする委員会に命じて編纂を開始し、ノロドム王の死後、シソワット Sisuvatthi 王が新たな委員会を設置して作業を継続し、更にモニヴォン Munivans 王が設置した校正委員会の手を経て、1934 年 2 月に完成した年代記である [15: 15-16]。筆者が使用したのは、1975 年までプノンペンの仏教研究所が所蔵していた写本のマイクロフィルムで、東京のユネスコ東アジア文化研究センターに保管されているものである。この写本のうち、1677 年までの記述は、マック・プアン Mak Phoeun とクン・ソック Khin Sok がフランス語訳し、EFEO から出版している [9; 12]。

1) この写本は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の坂本恭章教授が、1995 年に KWIC 索引を付けて出版している。

また、カンボジア年代記の特色として、口承伝承に由来するエピソードが混入している可能性が指摘されているが、²⁾ 実際に年代記の記述と口承伝承を比較する作業は未だ行われていない。筆者は、1997年12月7日～19日、1998年3月17日～22日にスレイ・サントー地区で行った口承伝承採集調査³⁾の結果と、年代記の記述の比較を本論において試みることにする。

I フランス領期のスレイ・サントー

1906年のレジダンス・コムボン・チャーム Résidence de Kompong-Cham 地誌によると、スレイ・サントー地方は面積 72,000 ha、40 の村落があり、カンボジア人 37,860 人、中国人 5,609 人、マレー人 1,752 人、アンナム（ベトナム）人 589 人、プノーン Pnong 人⁴⁾ 216 人の人口を持つ、レジダンス最大の地方 province であった[1: 25-26]。この地誌の村落リスト[1: 26-27]、EFEO 所蔵の村落リスト⁵⁾ [11]、1879年11月のサイゴン Saigon-プノンペン鉄道敷設調査[18: 119-234]によると、メコン河の自然堤防上には、帯状に村落が連続し、人口の大半がここに集中していた。この人口分布は現在も変化していない。

メコン河沿いに発達した村落のなかでは、トレイ Turei（地図 2: K-13）が行政センターであり、カンボジア人知事の住居とその地方法廷があった。トンレ・トーチ Tonle Toc 河とメコン河の分岐点には、中国人が多く住む商業センターのチヘ Cihe があり、内陸のトボーン・クモム Thbong Khmum 地方⁶⁾（地図 1: I-6）の出口として、米の収穫期に賑わった。この他プレック・タ・ノン Prek Ta Non、プレック・ドムボーク Prek Dombok（地図 2: R-7）、プレア・プロソップ Preah Prosop（地図 2: D-20）も、中国人、混血中国人が多く居住する商業センターであった[1: 27]。

現地の人々は、同地方をスロック・チョムカー Srok Comkar（畑のくに）、スロック・スラエ Srok Srae（水田のくに）に分類する。スロック・チョムカーは主にメコン河の自然堤防上に分布している。スロック・スラエは内陸の微高地上に分布し、雨季田耕作を主とする。エモニエ Aymonier の地誌には、河岸では木綿、桑、藍が作られ、内陸では米と砂糖椰子が豊かで

2) 例えばヴィッカリー Vickery は、VJ 写本の編纂に携わった人物から、口承伝承を年代記編纂に採用したという情報を得ている [22: 41]。

3) この調査は、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）によって行った。プノンペン芸術大学学生 Him Dara と元スレイ・サントー郡長 Lok Ñap の協力を得て、主に寺院の縁起、村落の起源、ネアク・ター Neak Ta（精霊）、付近の遺構等に関する口承伝承を聞き取った。

4) このリストでは、メコン河東岸に住む少数民族一般を指して「プノーン」と総称している。

5) 年代不明。同じファイル中のタケオ地方村落名表の年代は 1913 年である。

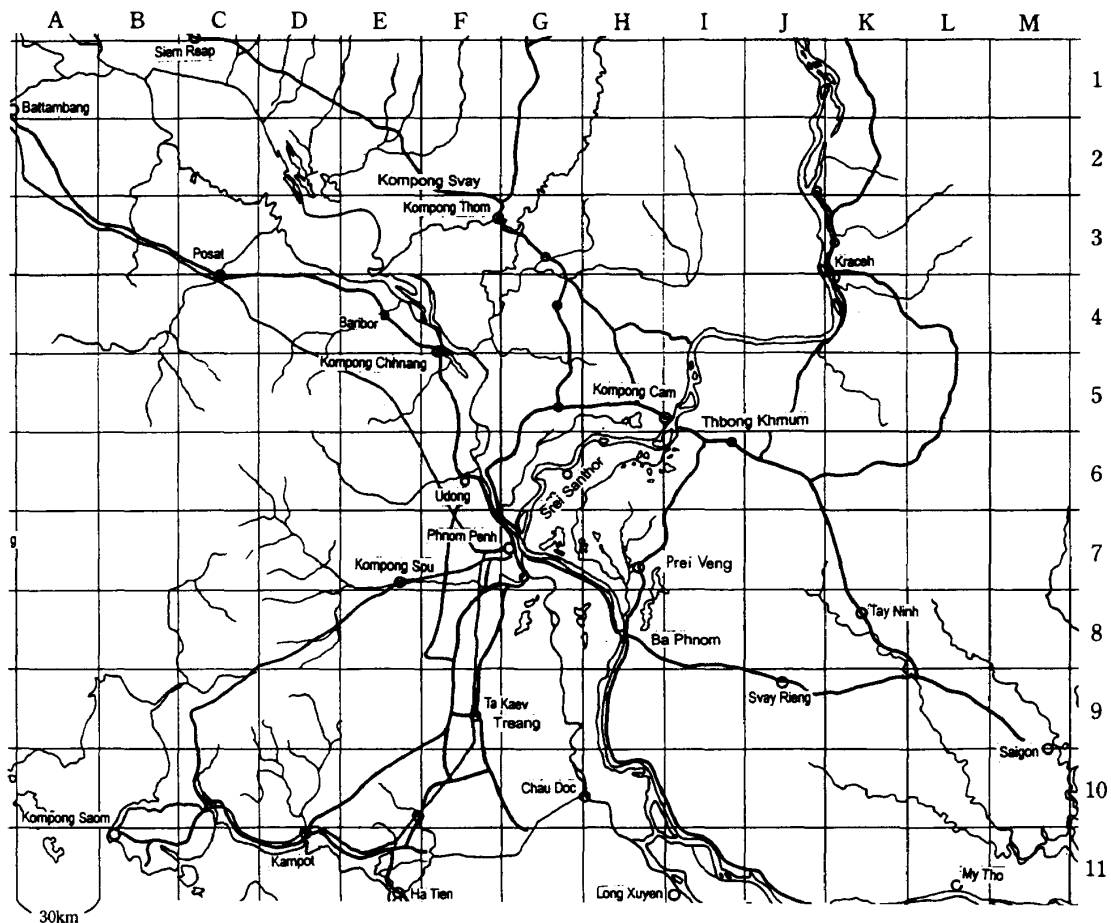
6) 1908 年のクロチェット地方地誌によると、トボーン・クモム地方は米の生産量が非常に多く、一部コーチシナのタイニン Tayninh 地区に流通し、一部メコン経由でプノンペンに流通した [16: 16]。

北川：「水王」の系譜

あると記されている[2: 259]。レジダンス地誌によれば、メコン河の自然堤防上での畑作が盛んで、特に煙草の生産はレジダンスで第一位であり[1: 44-45]、木綿の作付面積もコッ・ソタン Koh Soten 地方（地図1：H-6）に次いで大きかった[1: 42]。

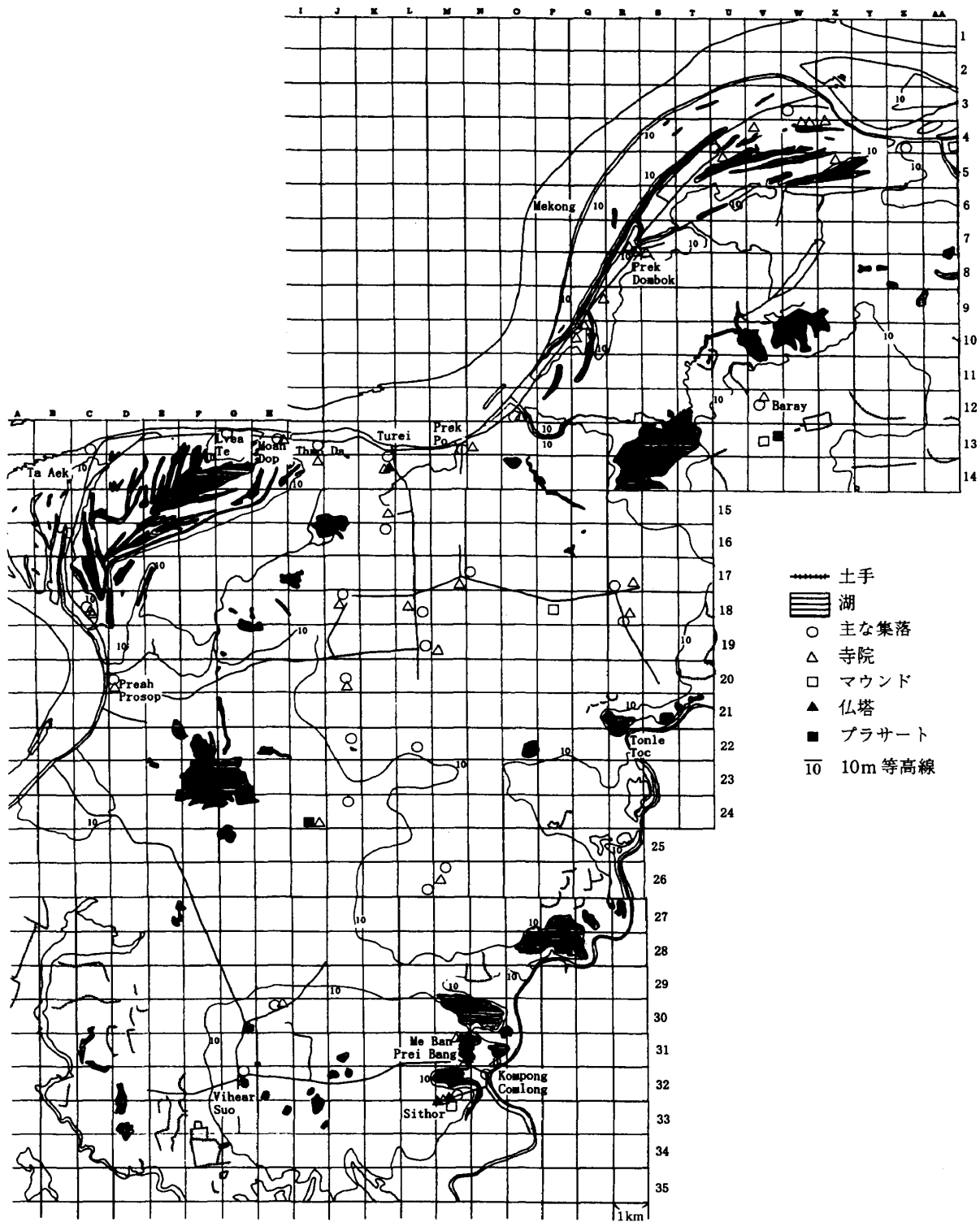
スレイ・サントー地方を通る主な交通路は、メコン河とトンレ・トーチ河の水路である。メコン河は、左岸沿いに、年間を通じて航行可能な航路が通っていた[1: 6]。トンレ・トーチ河は、平均幅 50～60 m で、乾季の 5 カ月間は水位が低く航行不可能であるが、それ以外の季節には現地人の大きな川船が航行した[1: 8-9]。現在もメコン河の水運は盛んで、プレーク・ポー Prek Po（地図2：M-13）、ロヴィエ・テー Lvea Te（地図2：G-13）、プレア・プロソップが主たる港になっている。

現在、この地方に国道はない。フランス領期にもブノンペンと結ぶ植民地道路⁷⁾は存在しなかったが、メコン河とトンレ・トーチ河の河川港をプレイ・ヴェーン Prei Veng 市（地図1：



地図1 ブノンペン周辺

7) route coloniale, 首都とレジダンスを結ぶ。



地図2 スレイ・サントー地域地図

H-7) に連絡するレジダンス道路⁸⁾が2本存在していた。(1) メコン河岸のチヘから、トンレ・トーチ河岸のロヴェー Love を通り、プレイ・ヴェーン市に続く道(8 km)は、雨季には水没した。(2) メコン河岸のトレイから、トンレ・トーチ河岸のコムボン・チョムローン Kompong-Comlong (地図2: N-32) を通り、プレイ・ヴェーン市に続く道(20 km)も、雨季にはやはり一部水没してしまった。この2本の道は現在も存在する。この他メコン河の自然堤防上にも陸路があった[1: 14-18]。この道は雨季にも浸水せず、現在ではプノンペンとスレイ・サントー地方を結ぶ最大の陸路になっている。これらの陸路は、プノンペンを中心とする陸路網の幹線から外れていたために、現在に至るまで舗装されることがない。またこの陸路以外にも、乾季には牛車であらゆる方向に向かうことができ[1: 16]、雨季には地方の大半が水没し、丸木舟や小舟で内陸の移動を行うことができた[2: 254]。この状況は現在も変化していない。

II バサンのクメール王

年代記ガルニエ訳とバンコク写本によると、ポニェ・ヤート王はサカ saka 暦 1310 年、辰年(1388 年)にバサンに都を移し、後にスロック・プノム・ペン・チャト・モック Srok Phnom Peñ Cato Muk (プノンペン) に遷都した[4: 72; 7: 344]。ムーラ訳では、ポニェ・ヤートは 1435 年に妃たちや大臣たちを連れて大河(メコン河)に沿って旅行し、スレイ・サントー地方に止まって、バサンの村の近くに王宮を建てさせたという。1446 年には全宮廷を引き連れて、チャト・モックの王宮に移動した[17: 39]。VJ 写本によると、ポニェ・ヤート王は、1431 年にスレイ・サントー地方のバサンの丘に移り[3: 85; 9: 66-67]、さらに 1434 年にトンレ・プラープ・チェム Tonle Prap Cheam (トンレ・サープ) 西岸のプノム・ドーン・ペン Phnom Don Peñ (プノンペン) に遷都した[3: 85-88; 9: 66-69]。

通常、このバサン遷都をもってポスト・アンコール期の開始とされるが、その年代は年代記写本によって異同があり、またポニェ・ヤートの存在を立証する同時代史料もない。しかし 14 世紀後半に巴山王(バサン王)の朝貢があったという『明史』の記述により、少なくともこの時期に、「巴山」と呼ばれる地に王権が存在したことが確認されている。

従来、この巴山王に関する中国史料の記述は、シャムによるアンコール王都攻撃と、それに続くアンコール放棄の年代を決定するために使われてきた。ウォルタース Wolters は、1371、1373 年に真臘国巴山王忽兒那の朝貢があることから、この間カンボジア王はアンコールにいなかったとする。次に 1378、1380 年には真臘国王参答甘武持達志が朝貢していることから、これ以前にカンボジア王がアンコールに帰還したと考える。1404 年には参烈婆毘牙が朝貢し、1405

8) route résidentielle, 主なセンターを通してカンボジアの地方間を結ぶ。

年には婆毘牙の後継者参烈昭平牙が父王の死を報告した。ウォルタースは「婆毘牙」がポニエ・ヤートであり、治世末期にはアンコールにいたと考えている。グロリエは「昭平牙」がポニエ・ヤートであるとする[8: 9; 23: 46-54]。いずれにせよ、これらは *somdec cau poñea* というタイトルのみの音訳と考えられるため、年代記の王名と同定するのは困難である。

ウォルタースの仮説では、この時期のカンボジア王は、アンコールとバサンの間を往復していたことになる。これに対してヴィッカリー Vickery は、「巴山」王を *a minor ruler in Basan* と解釈しても矛盾しないという見解を示した [22: 220-221]。ヴィッカリーの指摘は史料に基づくものではないが、筆者も『明史』に見られる「忽児那」のタイトル「真臘国巴山王」は、「真臘国の中の巴山の王」とであると解釈するほうが良いと判断する。

ヴィッカリーはさらに、(1)「巴山」がスレイ・サントーにあったという説を否定し [22: 56-58], (2) ポニエ・ヤートはアユタヤ系の王族であり、チューン・プレイに根拠地を置いたという新説を提示している [22: 491-502]。

(1) の論拠は、次の5点である。①中国語の「巴山」は *Pa Mountain* なので、バ・プノム *Ba Phnom* に当たる。②スレイ・サントーの公式地図、集落 *hamlet* レベルまでの人口センサスにバサンという地名が無い。③ガルニエが、バサンはトレアン *Treang* 地方にあったと言っている。④19世紀のネアク・ター(精霊)リストに、「スロック・トレアンのバサック・バサン *Pasak Pasan Srok Treang* のメー・ソー *me sa*」という精霊が出てくる。⑤カンボジアの地名は、クメール語で意味がある単語から成り立っているのに、*Ba San* はクメール語で意味を成さない。ここでヴィッカリーは、①バ・プノム説、③④在トレアン説を示唆しているが、最終的にこの時期のカンボジア史を再構成する際には、バサン=バ・プノム説を採り、篡奪者が一時的に政治センターを置いただけであると評価している [22: 515]。

これらのヴィッカリーの論拠は、何ら説得力を持たない。①中国史料で東南アジアの地名を記述する場合、通常意味ではなく音が採用される。また、意味を取った場合でも、「巴山」ならば「プノム・バ」でなくてはならない。②スレイ・サントーにバサンという集落は無いが、「バサンの丘」という地名は存在する。③ガルニエはバリボー *Baribor* の古名 *Amraptoron chor* を誤ってポーサット *Posat* 地方の山であると比定している例があり [7: 348], トレアン説が正しいとする根拠としては使えない。④複数の土地が同じ地名を持つ例が多数あり、バサンという地名が一カ所のみとは限らない。⑤の根拠であるサヴェロス・レヴィッツ *Saveros Lewitz* の地名考察では、16世紀の王都ロンヴェーク *Longvek*, 19世紀の海港コムポート *Kampot* 等が、クメール語で説明できない地名として挙げられている [10: 405]。

(2) の根拠となったのは、①アユタヤ年代記2/k. 125断片と、②年代記の記述で16世紀末に現れるリエム・チューン・プレイ(チューン・プレイのリエム)という名の人物が、ヤートの子孫であるとするヴィッカリーの推測である。この議論もまた、全く説得力を持たない。

① 2/k.125 断片は、ヴィッカー自身が発見し、「失われたアユタヤ年代記」としてコメント付き英訳を雑誌に発表したもので、成立年代などの情報は全く不明である [21: 50]。マック・プアンが既に指摘しているように [15: 22-24]、この断片に見られる記述が事実であると評価する根拠が無いだけでなく、2/k.125 断片中での Yat の根拠地は一貫して Caturmukh (ブノンペン) であり、チューン・プレイは全く言及されない。また、この断片中には、pasanti に住む maha barrg たちと Yat が協力するという記述がある [21: 33]。ヴィッカーは、pasanti を比定不可能とし、barrg は「グループ」を意味するが、barrg に種族 race または少数民族 ethnic tribe を意味する phau という語を付せられている例が2つあるので、pasanti の maha barrg とは、カンボジア西部の少数民族を指すと考える [21: 61-62]。しかし、異なる文脈中に現れる、pasanti の maha barrg と phau barrg が同一のものであるとする見解には疑問が残る上に、これを「カンボジア西部の」少数民族と特定する根拠が無い。②リエム・チューン・プレイとヤートの血縁関係は、全くの憶測で根拠が無い。さらに、スペイン・ポルトガル史料には、年代記のリエム・チューン・プレイと同一人物であると考えられる⁹⁾アナカパラン Anacapan という王が、シストル(スレイ・サントー)に根拠地を置いたことが記されている。しかし、スペイン・ポルトガル史料には、「リエム・チューン・プレイ」というタイトルは記されず、アナカパランとチューン・プレイの関係は確認できない。むしろ、リエム・チューン・プレイ＝アナカパランとスレイ・サントーとの関わりこそが、年代記とヨーロッパ史料に共通する確実な事項であり、もし彼とポニエ・ヤートの間に王系としての連続性を想定するならば、彼らの根拠地としては、スレイ・サントーの方がチューン・プレイよりも蓋然性が高い。

同時代史料の欠如から決定はできないが、(1) 年代記と中国史料の双方に、同一の地名の場所に王権が存在したことを示す記述があること、(2) バライ Baray 村(地図2: V-12)近辺のトゥオル・バサン Tuol Basan (バサンの丘)と呼ばれる地点には、アンコール期の遺構が残り、さらに今回の調査で表面採集された陶磁器片¹⁰⁾(表1)より、アンコール期から18世紀に至るまで、この地域に大量の陶磁器を収集しうるセンターが存続していたことが分かること、(3) スレイ・サントーはメコン河水運の要地に在ることから、アンコール末期のスレイ・サントー地方に、アンコール王都と並立する地方的な王権が存在した蓋然性は非常に高い。そして地方的な王権であったバサンが、独自に中国と関係を持ち始めたことこそが、ポスト・アンコール期の始まりを画する事件であると言えるのではなかろうか。

9) 年代記とスペイン・ポルトガル史料に共通して、1594年のシャム軍の侵攻によるロンヴェーク陥落の後、シストル＝スレイ・サントーに都してカンボジア王を自称し、スペイン・ポルトガル勢力に暗殺された人物として描かれている。

10) 鑑定は佐賀県教育庁文化財課の大橋康二氏、上智大学大学院丸井雅子氏による。

表1 陶磁器片の分布

場 所	種 類	数
Tuol Okña Pheakdei	16c 後半-17c 前半景德鎮染め付け	12
	16c 末-17c 前半漳州窯染め付け	1
	1655-1670s 肥前染め付け	1
	クメール褐釉	1
	クメール灰釉	1
	無釉陶片	1
Tuol Preah Theat	18c? 福建広東染め付け	1
	土地もの	3
Preah Thnol	12-13c 竜泉窯青磁	2
	17c 景德鎮染め付け	1
	クメール褐釉	5
	クメール灰釉	3
Tuol Basan	12-13c? 中国白磁	1
	12-14c? 徳化窯白磁	1
	クメール灰釉	1
	クメール無釉硬質陶器	1
地名不明	10-11c に典型的なクメールの盤口壺	1
	16c 前半-中葉景德鎮染め付け	1
	16c 後半-17c 初景德鎮染め付け	1
Tuol Me Pa	クメール灰釉	8
	クメール, 自然釉?	1
	クメール無釉硬質陶器	6

Ⅲ スダチ・コーン伝承

Ⅲ-1 東西勢力の対立

カンボジア年代記諸本には、15世紀後半～16世紀前半に2回の内乱が記されている。

第1はポニエ・ヤートの子スレイ・リエチエ Srei Reacea 王の治世に起こった、王の甥スレイ・ソリヨテイの反乱である。この時、王の弟トワマ・リエチエ Thomma Reacea に味方したシエム Siem (シャム) 軍が、スレイ・リエチエとスレイ・ソリヨテイを連れ去ったという。ガルニエ訳とバンコク写本では、スレイ・リエチエ王の即位と反乱の勃発がサカ暦 1359 年巳年 (1437 年)、トワマ・リエチエのプノンペンにおける即位がサカ暦 1390 年子年 (1468 年)、シャムの派兵がサカ暦 1398 年申年 (1476 年) である [4: 72-73; 7: 345-346]。ムーラ訳では、スレイ・リエチエ王の即位は 1472 年、反乱の勃発は 1473 年である。同年にシャムが侵攻し、チャンタブン、コーラート、アンコールを奪い、王とスレイ・ソリヨテイを連れ去った。王の息子トワマ・リエチエはバ・ブノムで軍隊を召集してシャム軍を撃退し、1477 年に即位する

[17: 40]。VJ 写本では、スレイ・リエチエ王の即位は 1468 年子年、反乱の勃発は 1475 年未年、トワマ・リエチエの即位は戌年（1478 年）である。巳年（1485 年）にトワマ・リエチエがシャム軍の派兵を請い、スレイ・リエチエとスレイ・ソリヨテイがシャムに連行された。また VJ 写本だけに、①スレイ・リエチエ王の勢力圏がトンレ・サープ湖周辺に分布し、¹¹⁾ ②スレイ・ソリヨテイの王宮はスレイ・ソー・チョー Srei So Chor（スレイ・サントー）で、メコン河東岸を勢力圏としたこと、¹²⁾ ③トワマ・リエチエの王宮はチャト・モックで、その勢力圏はバサック Basak 河西岸に展開していたこと¹³⁾が記される [3: 96-118; 9: 75-91]。このように、写本によって事件の年代や経緯に異同があり、同時代史料も存在しないため、この反乱の真偽を決定できない。

第 2 はポニエ・ヤートの孫ソコンナボット Sokonthabat 王の治世に起こった。ソコンナボット王はバサンに王都を置いたが、コーン¹⁴⁾という人物が反乱を起こし、王はストゥン・サエン Stung Saen まで逃げて殺された。コーンはバサンで王を自称したが、後にソコンナボットの弟であるチャン・リエチエ Can Reacea がコーンを破り、ロンヴェークを建都した。ガルニエ訳、バンコク写本と VJ 写本では、ソコンナボットの即位はサカ暦 1426 年子年（1504 年）、反乱の勃発はサカ暦 1430 年辰年（1508 年）、王の暗殺はサカ暦 1434 年申年（1512 年）である。王の弟チャン・リエチエは一時アユタヤに避難し、サカ暦 1438 年子年（1516 年）に帰国して、VJ 写本では 1525 年酉年、その他の写本ではサカ暦 1448 年戌年（1526 年）に、コーンを討ち破った [3: 118-184; 4: 72-74; 7: 347-348; 9: 93-143]。ムーラ訳では、ソコンナボットの即位は 1494 年、反乱の勃発は 1498 年、チャン・リエチエはポーサットに一時撤退したが、1505 年にコーンを討ち破った [17: 41-42]。

ヴィッカーリーは、ノン版年代記に見られるコーンのタイトル *ghun/ khun hlun brah stec*

11) 西岸はロリエプ・イエ Roleap Ie, アムラック・キリンボー Amrak Kirinbor（バリボー）、ポーサット Posat, バット・ドムボーン Bat Dombong, ニエン・ロン Neang Rong, シエム Siem（シャム）と接する地方まで、北岸はコムボン・シエム Kompong Siem, チューン・ブレイ, コーク・セツ Kok Seh, ストゥン・トラン Stung Trang, コムボン・スヴァイ Kompong Svay, コーク・カン Kok Khan, スリン Surin, サンケアク Sengkeak, リエウ Liev（ラオス）と接する地方まで。

12) ソムボー Sambor, トボーン・クモム Thbong Khmum, バ・プノムからバリア Barea, ドン・ナイ Dongnay, チャーム Cam（チャム）と接する地方まで。

13) ソムラオン・トン Somrong Tong, トボーン Thpong, コムボン・サオム Kompong Saom, コムポート Kampot, トレアン Trang, ピエム・カンチュー Peam Kañcoe。

14) ガルニエ訳では官人バス Bas の子、バンコク写本では大臣 Montrey の子で、クン・ルオン・コーン Khun Luong Kong のタイトルを持ち、他所からバサンに来て、王を自称した。ムーラ訳ではニエイ・コーン Néay-can というタイトルで、王族 Prea-vongsa に属する。VJ 写本では、コーンはモントレイ・トーチ Montrei Toc（小官人）のピチェイ・ニエク Picei Neak とボル・プレア・スレイ・ラタナ・トレイ Pol Preah Srei Ratana Trei（寺院に従属する民）のニエン・バーン Neang Ban の間に生まれ、ニエン・プウ Neang Peu という姉がいた。

を問題とし、カンボジアでは(1) khun hluon というタイトルは年代記以外に現れず、むしろタイのタイトルであると指摘する。またポニエ・ヤートと「巴山」に関する議論に続けて、ポレ・マスpero Porée-Maspero 夫人の論文を根拠に、(2) コーンの活動拠点バサンが西岸にあったとしても差し支えないという見解を示す[22: 64-66]。最終的な歴史の再構成では、(1)(2)を根拠に、コーンはアユタヤ系のヤートの子孫で、アン・チャン(チャン・リエチエ)派に対抗した人物であるという解釈を提示している[22: 498]。

ポレ・マスpero夫人の論文で分析されているのは、ネアク・ター・クレアン・ムアン Neak Ta Khleang Moeang 伝承である。ムアンは、東岸の叛徒コーンと戦った将軍として、年代記ではVJ写本にのみ登場する。しかし、夫人が採集したポーサットのムアン伝承に現れるコーンはシャム王であり、チャン(チャン・リエチエ)はコーンに殺されたクメール王である。そして、ムアン伝承はポーサット、ロンヴェークとシャムで起こった事件を語り、メコン東岸には言及しない。また、ムアン伝承に現れるコーンと、スレイ・サントーのコーンのエピソードは、名前が共通するだけである。夫人自身も、本来ポーサットのものであったムアン伝承と、本来スレイ・サントーのものであったコーン伝承の2つが、年代記に混入した可能性を示唆している[19]。また、マック・プアンによると、ノロドム治世に完成したと考えられるフランス極東学院文書館所蔵のP 58写本では、篡奪者コーンのエピソードは、17世紀初頭のスレイ・ソリヨボワ Sri Suriyobarm 王による国内平定と、17世紀末のアン・ソー Ang Sur 王治世に関わる事件として採用されている[15: 15]。スレイ・ソリヨボワとアン・ソーは、いずれもメコン東岸の勢力と戦った王である。このことは、本来メコン東岸の伝承であったものが、年代記編纂に当たって、正統王の敵対者のエピソードとして採用された可能性を示していると言えるのではなかろうか。

Ⅲ-2 スダチ・コーン伝承

現地調査の結果、スレイ・サントー地域の3カ所の物語として、スダチ・コーン伝承が語られていることが分かった。今回採集した口承伝承に現れるコーンは、年代記に記されるような王位篡奪者ではなく、スレイ・サントー土着の王である。

Ⅲ-2-1 内陸バライ村周辺

バライ村で採集した伝承では、¹⁵⁾ プラサート・プレア・ティエト Prasat Preah Theat (地図2: V-13) には、かつてスダチ・コーンが建立した寺があったという。バライ村の近辺には、プレア・トゥノル Preah Thnol (道)(地図2: WX-12/13) に囲まれたヴィエル・プロナン・セッ Veal Pronang Seh (競馬場) と呼ばれる方形の遺構、トンレー・オム Tonle Om (ボート

15) インフォーマントは、Kong Ceam, 男性 75 歳。

レース池)と呼ばれる2つの池(地図2: W-13), コーンの市場跡とされるレンガ片の散乱地, コーンの居城であったというトゥオル・バサン, 裁判所であったというトゥオル・オクニャ・ペァカデイ Tuol Okña Phakdei などの小丘群が分布している。また, プラサート・プレア・ティエトにはナーガの上に横たわるヴィシュヌ神の浮き彫りが残っているが, この彫刻がコーンの像であると伝承されている。すなわちバライ村周辺では, アンコール時代のプラサートをはじめとする遺構群が, スダチ・コーン伝承に結び付けられている。

Ⅲ-2-2 メコン河岸トレイ村周辺

トレイ村のワット・ソコンリエム Vat Sokunream 別名ワット・プロコル Vat Prokol で採集した伝承では,¹⁶⁾ 本堂正面にある巨大なチェデイ cedey (仏塔) が, スダチ・コーンのチェデイであるといわれている。またスダチ・コーンの師であるクルー・サウ Kru Sau の遺骨も, このチェデイに納められているという。スダチ・コーンはクルー・サウが買ったトレイ・ポー Trei Po という魚の腹の中に居た赤子であり, ター・ティエ Ta Tea, イエイ・バーン Yeay Ban の夫婦に育てられた。クルー・サウがトレイ・ポーを買った場所が, 現在の地方知事の所在地であるプレーク・ポーである。スダチ・コーンは, 父親とは知らずに王と戦争をしたが, 後に自分が実の父親と戦っていたことを知ると, 武器をこの寺に納めた。スダチ・コーンが死んだとき, 遺体はワット・モアン・ドップ Vat Moan Dop (地図2: H-13) で焼き, ワット・トモー・ダ Vat Thmo Da で葬式をした。ワット・プラサート・トモー・ダ Vat Prasat Thmo Da (地図2: I-14) でも同様の伝承を得た。¹⁷⁾

VJ 写本にも, この伝承と類似するエピソードがある。コーンは赤子の時に大魚トレイ・ポーに飲み込まれたが, 夢でお告げを受けた僧侶ソムダチ・プレア・ソクンティエトゥパテイ Somdec Preah Sukuntheathiptei に助けられ, アー・バーン A Ban とメー・ティエ Me Tea という Teasa Teasei (奴隷) の夫婦に育てられた[3: 129-131; 9: 102-103]。コーンが成人した後, 辰年に, ソコンナボット王は, 巨大なナーガが追ってきて, 火を吹いて王宮を焼き, 口に白い傘をくわえて東に去るという予知夢を見た。翌日, 王の目には, 2頭のナーガがコーンの左右に絡みついているのが見えた。この他様々に不吉な前兆があり, 王はコーンを殺そうとしたが, ナーガがやって来てコーンを守護した。コーンは師であるソムダチ・プレア・ソクンティエトゥパテイの寺に逃げ込み, 部下をトモー・ダの森に集め, バ・ブノムに行き行って反乱を起こした。ソコンナボット王は東からやって来たナーガによって, ストゥン・サエンの水に引き込まれるという夢を見た後に, コーンの兵士に殺された[3: 134-148; 9: 105-116]。このように VJ 写本では, コーンにまつわるナーガのイメージが強調されている。

16) インフォーマントは, Chun Chuon, 男性 67 歳。

17) インフォーマント情報欠落。

Ⅲ-2-3 トンレ・トーチ河岸シッター村周辺

ワット・シッター Wat Sithor (地図2: M-32) の本堂正面(東)に4基, 本堂裏(西)に1基, 煉瓦とラテライトでできた巨大なチェデイがある。同寺で採集した口承伝承では¹⁸⁾東側のチェデイのうち南北軸上に並んだ3基は將軍のものであり, 西側のチェデイはソコンナボット王の王子のものであるという。寺の南側にはトゥオル・バサンという名の小丘があり, 口承伝承では, ここにあったコーンの王宮を壊して, ソムダチ・ロヴィエ・アエム Somdec Lvea Aem がワット・シッターを建てたという。ワット・シッターと同じ南北軸上に分布するワット・プレイ・バン Wat Prei Bang (地図2: M-31), ワット・メー・バーン Wat Me Ban (地図2: M-31) も, コーンに結び付けられる寺院である。ワット・メー・バーンで採集した伝承によると¹⁹⁾シッターに住むイエイ・バーン Yeay Ban は, 娘に対する求婚者があまりに多かったため, ワット・メー・バーンの場所に逃れてきて, プレイ・バン(プレイ=森, バン=隠す)の森で娘を隠した。コーンはこのイエイ・バーンとター・チェイ Ta Cei の子である。

VJ 写本には, コーンの両親であるプレア・ピチェイ・ニエクとネアク・メー・バーンがワット・メー・バーン寺院を建てたという記述がある[3: 132; 9: 103]。また, ソコンナボット王が, コーンの姉でもある寵妃ネアク・ムニエン・プウ Neak Mneang Peu の病氣平癒の祈願にワット・プレイ・バンを建てたという記述もある[3: 133; 9: 104-105]。すなわち, シッター村周辺のチェデイおよび寺院は, ソコンナボット王とスダチ・コーンの両親に関連付けられている。

Ⅲ-3 小 括

年代記の各写本に共通して, スダチ・コーンの勢力は, バサンを基盤としていたと記述される。しかし, コーンの王位篡奪が史実であったか否かは決定できない。少なくとも VJ 写本に見られるエピソードは, 口承伝承が採用された可能性が高いと考えられる。口承伝承と VJ 写本に共通するコーン像は, ①スレイ・サントー地域に見られる古代の遺構の建設者であり, ②メコン河の大魚の腹から現れた赤子であり, ③ナーガの像で表現され, あるいはナーガの守護を受けた人物である。すなわち, このコーンは単なる「王位篡奪者」ではなく, スレイ・サントー土着の, メコン河と強く結び付けられた伝承上の英雄であると言えるのではなかろうか。

18) インフォーマントは, Koy Hun, 男性 82 歳。

19) インフォーマントは, Ok Tuk, 男性 80 歳。

IV 「大航海時代」のスレイ・サントー

IV-1 ロンヴェーク落城後のスレイ・サントー王権

年代記によると、1594年にシャムの侵略を受けてロンヴェークが落城した時、当時のソター Sotha 王はスレイ・サントーに逃げ、続いて、ガルニエ訳とバンコク写本に拠ればリエウ Liev (ラオ) 国に、ムーラ訳と VJ 写本に拠ればストゥン・トラエン Stung Traeng 地方に逃げた [3: 270-282; 4: 80; 7: 354-355; 9: 205-215; 17: 52-53]。ロンヴェーク落城後の時期に関する年代記の記述は、スペイン・ポルトガルの同時代史料の記述と一致する。シャムの攻撃を受けたカンボジア王がラオの国に逃亡したことも、同時代のスペイン史料に記述がある [30: 74]。

ソター王の逃亡後、年代記ではリエム・チューン・プレイ、スペイン史料ではアナカパランと呼ばれる人物が、シャム軍を追いついて、スレイ・サントーの王位に就いた [3: 282-285; 4: 80; 7: 356; 9: 216-217; 17: 53; 30: 77]。モルガは、同王がチャムパに遠征軍を派遣し、配下にはマライ (マレー) 人の軍隊と大砲類および象軍を持ったマライ人モロ (ムスリム) オクニャ・ラカサマナ Ocuña Lacasamana とカンコナ Cancona, 大砲を備えた 10 隻の快速帆船団を持つオクニャ・デ・チュー Ocuña Dechu がいたと記している [30: 82, 134-139]。後に 2 人のヨーロッパ人がリエム・チューン・プレイ＝アナカパランを殺し²⁰⁾ソター王の末子をもスレイ・サントーの王位に就けた [3: 287-289; 4: 80-81; 12: 72-73; 7: 356-357; 17: 54; 30: 79-82]。

年代記によれば、この新王は、トボーン・クモム征服の最中に殺された。王を殺したのは、ガルニエ訳、バンコク写本とムーラ訳では、チャーム Cam 人バオラッ Baorah とチュヴィエ Cvea 人ロック・スマウ・ニエ・ヴィエ Lok Smau Nea Vea [4: 81; 7: 358-359; 17: 54], VJ 写本では、トボーン・クモムのピエム・チー・レアン Peam Ci Leang 村で王を自称するチャーム人パオ・ラート Pao Rat とレアク・スミナー Lak Smina である。VJ 写本では、王を殺した後、パオ・ラートはトゥオン・パオ・ラート Tuon Pao Rat の名で王を自称し、レアク・スミナーはウパヨリエチを自称して、トボーン・クモムと周辺の地方を支配したという [3: 289-290; 12: 75-76]。モルガも、王とスペイン・ポルトガル人は、オクニャ・ラカサマナとカンコナに殺されたと記している。この 2 人のマレー人は、さらにチャムパを侵略しようとして殺されたという [30: 176, 248]。

20) 王を殺したヨーロッパ人達は、ガルニエ訳とバンコク写本ではソター王の養子であり、ムーラ訳ではヴェロ Vélo, VJ 写本ではヴェサ Vessa とヴィロ Vilo と呼ばれる。モルガによるとポルトガル人ディオゴ・ヴェロソとスペイン人ブラス・ルイスである。

年代記では、この後スレイ・サントーに2王が立った。この間、大小の地方は王となるべく相争い [7: 361], スロック・クラウ Srok Krau (外のくに) の人々は王を自称して従わず [4: 81], またはトボーン・クモムのチャーム人たちが度々王宮の近隣の地方を侵略し [3: 295; 12: 81], 国内が混乱した。モルガにも同様の記述が見られる [30: 176]。事態を收拾するために、王族たちはソター王の弟スレイ・ソリヨボワ Srei Soriyopor をシャムから帰国させ、王位に就けた。スレイ・ソリヨボワは王子達を派遣して、地方を平定した [3: 322-327; 12: 109-112]。ソターの兄弟がオディア (アユタヤ) から帰国してカンボジアの王位に就き、シストル Sistor (スレイ・サントー) を始め各地の平定を進めたことは、モルガにも記されている [30: 249]。この後、スレイ・ソリヨボワの子チェイ・チェッター Cey Cetha 王がウドン王宮を建てて遷都する。

IV-2 スペイン・ポルトガル史料に現れるスレイ・サントー

1555年のガスパール・ダ・クルスは、カンボジアにはシストル、ロエク Loech (ロンヴェーク), チュドゥルムク Chudurmuch (プノンペン) の3つの都市があったと記す [25: 76]。1604年のサン・アントニオ San Antonio の記述では、カンボジアの都市はアンコール Anchor, シストル, チュルドゥムコ Churdumuco (プノンペン) の3つである [5: 95]。ジャック Jaque はシストル王宮のパゴダは金か銀製で、ルビーの眼とダイヤモンドの歯がついていたといい、中には高さ60クデー (30 m) に至るものもあったと記している [8: 160]。サン・アントニオによると、シストルはメコン河の岸上に在り、当時の人口は50,000人以上で、ここに宮廷があった [5: 95-96]。一方プノンペンの人口は、ジャックによると20,000世帯で、うち3,000世帯は中国人であった [8: 152]。クルスはメコン河上流部を「シストルの河」と呼び、トンレ・サーブ河を「ロエクの川」と呼ぶ [25: 76]。クルスがロエクはプノンペンから12レグワ (1 legua = 5 km) の位置に在るというのに対し [25: 76], モルガはシストルがプノンペンから9レグワ離れていたとする [30: 78]。即ち16世紀のスレイ・サントーは、商都プノンペンに匹敵し、王都ロンヴェークに対抗しうる都市であった。

クルスは、メコン河を下って商取引にやってくるラオ人たちを目撃している。ラオ人たちは麝香と金をもたらし、代わりに綿織物などを入手していた [25: 74]。16世紀は、メコンを通じて、ラオ人たちが国際交易に参加していた時代と考えることができる。そして、ラオとの主たる交易路メコンを押さえていることが、16世紀のスレイ・サントー繁栄の基盤であったと想定できよう。

IV-3 小 括

16世紀後半のスレイ・サントーは、メコンの河川交通を基盤に、ラオとチャーム・マレー、中国、スペイン、ポルトガル等を結び付ける機能を持つことによって、ロンヴェーク、プノン

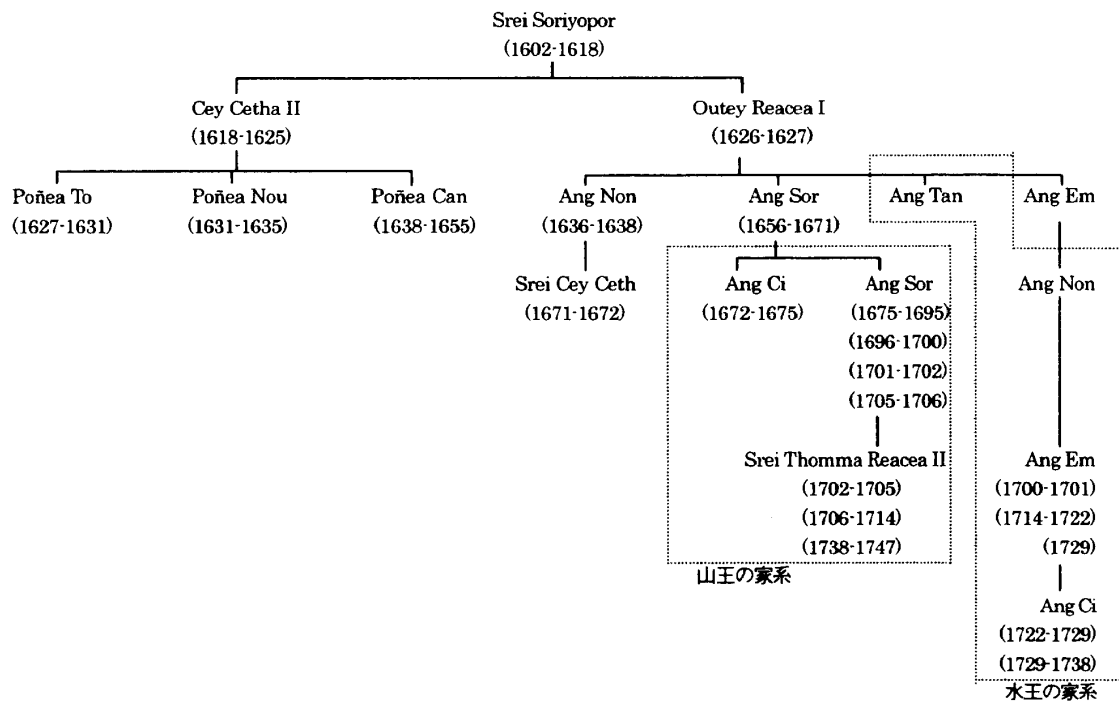
ペンに匹敵する都市として繁栄することができた。故に、16世紀末にロンヴェークが崩壊すると、スレイ・サントーが唯一の王権として浮上し、年代記の記述に現れることになったのであろうと考えられる。

V 「華夷変態」の時代

V-1 山王と水王

久光らの研究によって、1673年から1738年にかけて、カンボジア王族を二分する内乱が続いたことが分かっている [13; 14; 27; 28]。対立する王族の一方はカエウ・ファー・アン・チー Kaev Hva Ang Ci 王—チェイチェッター・アン・ソー Cey Cesda Ang Sor 王—トワマ・リエチエ Thomma Reacea 王と続く正統王の系統であり、もう一方はウパヨリエチ・アン・タン Ang Tan—ウパヨリエチ・アン・ノーン—アン・エム Ang Em 王—アン・チー Ang Ci 王と続くウパヨリエチの系統である（系図）。

1685年にシャムを訪れたフランス人ショワジ Choisy は、シャムの高官フォールコン Phaulkon からの情報として、「[カンボジアには] 2人の王がいて、1人をシャム王が、もう1人をコーチシナ王が支援している」と記す [6: 422]。すなわち、シャム側ではこの抗争を2王の対立と理解していたことが分かる。



系図

表2は『華夷変態』の記述に現れる1675～1723年のカンボジア王族の呼称を整理し、年代記と比較したものである。これを見ると、1689～1691年に混乱があるものの、一貫して正王ソーを本屋形（の子）または大王（の子）、ウパヨリエチ・ノーンを二王（の子）と表している。1680年7番東（ママ）埔寨船は、「大王」「二王」の代わりに「山王」「水王」という呼称を採用する。1714年からソーの子トワマ・リエチエ王と、ノーンの子エム王の抗争が始まると、抗争の当事者は一貫して「山王」「水王」と表現される。「カンボジアには古来、山王水王という2人の屋形がいて政治を執っていた」という記述から（1717年廣南船、柬埔寨船、占城船、暹羅船、2番暹羅船）、「大王」「二王」の他に、ソーの系統を「山王」、ノーンの系統を「水王」と呼ぶことが分かる。

VJ写本によると、1674年の戦闘の結果、カンボジアはノーンに属する東岸と、ウドンの王に属する西岸に分裂してしまった[3: 429; 12: 212]。1673～1691年の東西両勢力の動きを、VJ写本からまとめたのが表3である。これによると、王はしばしばトンレ・サーブ西岸のソムラオン・トン Somraong Ton に滞在し、他方ウパヨリエチはスレイ・サントーそしてユオン Yuon 国（ベトナム）に滞在し、両勢力はプノンペン前面で対峙していたことが分かる。

『華夷変態』には、一王がシャムとの境の「深南」（1675年22番廣南船）、あるいは「奥山」（1679年20番柬埔寨船）にあり、二王もカンボジアより奥の「らう²¹⁾」（1679年20番柬埔寨船、1679年15番東京船）、廣南の「ちやんいん」（1681年4番5番柬埔寨船）あるいは「廣南」に逃れたという記述がある。さらに、1676年22番23番廣南船は「一王は山中に居り、二王は海辺を領していた」と報告し、1687年115番大泥船も「大王は山中に引きこもり、二王は中国人を取りたてて海辺に居た」と報告している。

以上の記述から、ソーの系統がウドンからカルダモン山地にかけてのトンレ・サーブ西岸を勢力基盤としていたのに対し、ノーンの系統はメコン河から海までを勢力基盤とし、そのために、後に「山王」「水王」と表現されるようになったと考えられる。そして、トンレ・サーブ西岸に拠ったソーの系統は、その西に隣接するシャムに接近し、メコン河に拠ったノーンの系統は、メコンを介してベトナムに接近したのである。

V-2 水王と明の遺臣

1679年に明の遺臣を名乗る中国人たちが廣南王に帰附し、廣南王は彼らを真臘国の東浦地方に入植させたという事件があった[29: 192-196]。『華夷変態』の記述から、カンボジアの二王が、メコン河口に定着して海賊行為を行っていたこれらの中国人勢力と、次々と同盟したことが分かる。

21) 17世紀のオランダ人はプノンペンより上流のメコン河を「ラオス河（Revier Lause）」と呼ぶ[24: 91-92]。この場合の「らう」もプノンペンより上流のメコン河沿いを指すと思われる。

北川：「水王」の系譜

表2 『華夷変態』に現れる呼称

年	船 名	王 名	王 名	そ の 他
		アン・ソー	アン・ノーン	
1675 年	22 番廣南船	元屋形の嫡子, 本屋形	元屋形の兄の子	
1676 年	22 番 23 番廣南船	本屋形, 一王	二王	一王は元屋形の孫
1678 年	21 番廣南船	本屋形	二王	
1679 年	8 番暹邏船	大王の嫡子		
	20 番柬埔寨船	大の子	二王の子	
	15 番東京船	本屋形の子, 大王の子	副屋形二王	
1680 年	7 番柬埔寨船	山王	水王	山王と水王は兄弟
1681 年	4 番 5 番柬埔寨船	本屋形の嫡子	二王	
1682 年	11 番 12 番柬埔寨船	一王, 本屋形	二王	二王は本屋形の従兄弟で執権
1683 年	5 番暹邏船	屋形		
	19 番暹邏船	屋形		
1687 年	107 番暹邏船	本屋形	二王	二王は本屋形の甥
	115 番大泥船	大王	二王	
1689 年	52 番柬埔寨船	屋形の弟六輪	屋形, 六恁	
	69 番廣南船	庶子?	嫡子の屋形?	嫡子の屋形と庶子
	73 番廣南船	庶子?	嫡子の屋形?	嫡子の屋形と庶子
	74 番柬埔寨船	庶子の三王?	嫡子の二王?	本屋形嫡子の二王と庶子の三王
1690 年	75 番柬埔寨船	惣領で大王の屋形	弟の二王	同父異母兄弟
	89 番廣南船	二王?	大王?	屋形兄弟大王二王
	90 番廣南船	弟?	屋形?	嫡子の屋形と弟
1691 年	69 番柬埔寨船	大王	二王	大王と二王はいとこ同士
	82 番暹邏船	二王	大王	
	88 番暹邏船	二王	大王	
1692 年	58 番柬埔寨船	本屋形大王	二王	二王はいとこで執権
	61 番柬埔寨船	大王	二王	
	63 番柬埔寨船	大王	二王	
	68 番廣南船	大王	二王	
1693 年	66 番廣南船	大王	二王	
	67 番柬埔寨船	大王	二王	
1698 年	38 番柬埔寨船	屋形		
		トワマ・リエチエ	アン・エム	
1717 年	廣南船	山王	水王	
	柬埔寨船	山王	水王	
	暹邏船	山王	水王	山王の父王=アン・ソー
1718 年	23 番暹邏船	山王	水王	
1719 年	26 番暹邏船	山王	水王	
1722 年	2 番暹邏船	山王	水王	
1723 年	12 番柬埔寨船	山王	水王	

表3 年代記に現れる東西の抗争

年	戦 闘	西 岸 勢 力 の 動 き	東 岸 勢 力 の 動 き
		カエウ・ファー・アン・チー王	ウパヨリエチ・アン・タン
1673 年		ブノンベンに布陣	ユオン軍を率いて侵入 ロヴィエ・アエムに布陣
1674 年	ブノンベンで戦闘 水軍がチュラン・チョムレッで、 陸軍はブン・クバエンで戦闘 戦闘	ソムラオン・トン地方プラム・ドムラ ン王宮に住む	ブノンベン砦を落とす ウパヨリエチ病死 ウパヨリエチ・オン・ノーン 敗北、スレイ・ソー・チャーに撤退、 徴兵 ロヴィエ・アエムに進出 キエン・スヴァイ地方、コッ・ス ラー・カエトに布陣
1675 年	ポニエ・ルーで水陸軍の戦闘	王病死 チェイチェッター・アン・ソー王 ウドン・ルー・チェイ王宮に戻る カエト・ソムラオン・トン・スダムの トゥオル・オーチュルン王宮に住む	敗北、ユオン国に撤退
1683 年	ブノンベンで戦闘 ウドンで戦闘 カエト・ソムラオン・トン・スダムの ブーム・バエク・チャーン、カエ ト・ソムラオン・トン・チュヴェー ンのヴィエル・パオンで戦闘	ブノンベンに派兵、敗退 ウドンまでの陸路沿いに監視所を設け る スロック・カンダールのプラム・ドム ラン砦に撤退 ウドン・ルー・チェイ王宮に戻る 川沿いにブノンベン、チュローイ・ チョンワーまで監視所を設ける	ユオン水軍を率い、カエト・バサッ ク、プレア・トロペアン、クロムオ ン・ソーを征服 カエト・ロヴィエ・アエム、チュ ローイ・チョンワーに砦を築く ウドン・ルー・チェイ王宮攻撃 敗北、チュローイ・チョンワー砦を 放棄、ロヴィエ・アエムからカエ ト・スレイ・ソー・チャーに撤退
1689 年	ソムダチ・チャウ・ポニエ・ヌー と中国人タン・チョン・イエが王 を裏切ってウパヨリエチに組する ストゥン・トタン・トンガイで戦 闘 ブノンベン、チュローイ・チョン ワーで戦闘	ブノンベンに布陣	ロヴィエ・アエムからチュローイ・ チョンワー砦を攻める 敗北、チュローイ・チョンワー砦、 ロヴィエ・アエムからカエト・スレ イ・ソー・チャーに撤退 ユオンの援軍を得て、ロヴィエ・ア エムに布陣 敗北、カエト・スレイ・ソー・ チャーに撤退 発病
1691 年			ウパヨリエチ死亡 遺児のアン・エムはユオンを頼って 脱出、東岸の地方は王に帰順

その第1は1676年に(22番23番廣南船)船数艘を持ち、手下の賊徒数百人を持っていた中国人海賊楊八である。第2の中国人は1682年(1683年5番19番暹邏船)11月に、兵船70艘以上、3,000人程でカンボジアに乗り込んだ東寧秦舎手下の禮武鎮之官楊二であるが、彼を恐れた一王が山中に逃亡するという事件は引き起こしたものの、彼自身にカンボジアを侵略する意図はなかったという。第3は1687年(107番暹邏船)にこの楊氏を討った広東人の副将黄震である。彼は二王を支持してカンボジアの海辺を支配した。1688年11月にも(1689年52番74番柬埔寨船、69番廣南船)黄震は500人を引き連れ、大船5艘を持って、二王と結んで一王に反乱し、1689年3月初めにも、カンボジアの「外匡郎(グハコンロン)」で一王の軍と戦ったが、廣南軍に滅ぼされてしまった。第4が「台湾の海手の大将禮武之官の手下陳尚川」である。1690年(75番柬埔寨船)、彼は船数十隻を持ってカンボジアの湊口工代馬(コンタイマア)に陣を据え、行き来する者から略奪していたが、二王が彼と結んで一王に反乱した。

すなわち、17世紀後半のスレイ・サントーに自立した二王の勢力基盤は、メコン下流部に入植したこれら中国人勢力と結ぶことにあったと考えられる。スレイ・サントーは、トンレ・トーチ河を通してプノンペン正面のロヴィエ・アエムと接続し、プノンペンを抑え、かつメコン河下流部の航行権を掌握するに適する位置にある。

V-3 二王死後のカンボジア

1691年にノーンが死亡すると、年代記の上ではスレイ・サントー勢力が消滅してしまう(表3)。藤原は、このノーンの死を機会として、ベトナムの阮氏が嘉定府を置いてサイゴン周辺の直接統治に乗り出し、中国人には清河社と明香社を建てさせて安南籍に編入していったと理解している[29:195]。しかし、二王の死から嘉定府の設置までの数年間は、『華夷変態』によるとカンボジアは平穏で、「カンボジア屋形仕出し船」を含めて、盛んに日本に商船が来ていた²²⁾(1694年61番暹邏船、62番柬埔寨船、1695年26番27番28番柬埔寨船、1696年51番69番81番柬埔寨船、1697年77番81番83番87番柬埔寨船)。

1698年(38番40番69番柬埔寨船)2月になると、廣南屋形の使者が、船4艘に300人以上を引き連れて、カンボジアに来て朝貢を要求し、拒否すれば兵船を差し向けると脅して、5月中旬に帰国したことが報告された。同年中のカンボジアは平穏であったが、翌1699年(34番53番柬埔寨船)になると、同年の中国商船7艘のうち4艘が、帰国の際にカンボジアの湊外で待ちうけていた海賊船数十艘に襲われるという事件が起きた。この海賊の頭領は先に述べた陳尚川であり、カンボジアと通商する船から彼に断りを入れ、商船1艘から荷物を少々陳尚川のほうへまわす代わりに妨害をしないように交渉したという。この他カンボジアは平穏であった

22) 1691年69番柬埔寨船は、カンボジアの「産物は糸端物類は少しも無く、鹿皮、下黒砂糖、漆、象牙、蘇芳、びんろうじゅ、薬種類が少々ある」と報告した。

ということだが、廣南側（60 番 61 番 62 番廣南船）では、カンボジア屋形が先年の朝貢要求を拒否したため、廣南屋形は兵船数百艘をカンボジアに差し向けることに決定し、カンボジア湊口にいた海賊陳尚川が兵船の頭人になった。1701 年（58 番占城船）にも廣南屋形がカンボジアを討伐するという噂があると報告された。1702 年の風説書 89 番によると、廣南とカンボジア屋形は去年まで不和であったが、この年から和睦したという。この後『華夷変態』にはカンボジア討伐に関する報告が見られない。1708 年（104 番柬埔寨船）にカンボジアは平穩であるという報告があった後、1717 年までカンボジアに関する報告は見られなくなる。

1698 年は阮氏が嘉定府を置いた年である。『寔録前編』巻七 [31: 15-16] には次のように記されている。1699 年に匿秋（アン・ソー）が謀反し、碧堆，求南，南栄の 3 壘を築いた。陳上川（陳尚川）らは 1700 年に出兵し、南栄，碧堆の砦に至った。匿秋は城を捨てて逃げ、匿淹（アン・エム）は降伏した。

『華夷変態』の記事から、副王の勢力がいなくなったメコン河では、中国人陳尚川が実質的に河の航行を支配し始めたことが分かる。陳尚川はかつてカンボジア副王と結んで正王に対抗していたが、副王死後に廣南王のカンボジア討伐の先鋒となった。メコン河交通は中国人に、そしてこれと結んだベトナムの手に移った。またこの時期は、ベトナムの対カンボジア政策の転換期でもあったといえる。

V-4 カンボジアを巡るシャムとベトナムの対立

『華夷変態』には、1717 年から 1723 年にかけて、再びカンボジアの内乱が報告される。まず 1717 年（廣南船，柬埔寨船，占城船，暹邏船，2 番暹邏船）の情報を要約すると次のようになる。カンボジアには古来山王水王という 2 人の屋形がいて政治を執っていたが、甲午年（1714 年）以来山王の臣下偓雅の官吳達舎の勧めで戦闘になり、山王が負け、翌未年の正月に吳達舎とともにシャムに逃げた。1716 年正月に吳達舎が病死したので、シャムから人を遣ってカンボジアの消息を聞いたところ、カンボジアに居た山王の父王から言ってきたことには、元々吳達舎が反逆したのでこのような乱になったのであり、前々の通りシャムに貢納して和睦の扱いにしたいということであった。しかしシャム屋形はこれを受け入れず、山王を援助して、1716 年 3 月に大象 100 匹，数千の兵隊をもって陸路から直に国境の黄杲という所に 3,000 ～ 4,000 人の兵士を送ったが、黄河²³⁾の水が大変氾濫していたので引き返した。シャム王は怒って再び水陸両方から兵を進め、1717 年 4 月にも山王とシャム軍は黄杲まで行ったが、やはり大水があふれていて戦えず引き返した。水王の方も防戦に備えて廣南屋形に援軍を頼み、廣南も国境まで守護のため惣兵の官陳氏翁氏の両營の兵を出した。1717 年 8 ～ 9 月にもシャムが水王を討つは

23) 『華夷変態』には、中国国境から 3 本の「黄河」が中国，カンボジア，シャムに流れているという記述があり（1690 年 84 番暹邏船），この「黄河」はメコン河を意味する。

ずであるという噂があった。翌年（23 番暹邏船）にも未だ戦闘が続いていて、暹邏船が廣南の海上を通ったとき攻撃された。1719 年には（26 番暹邏船）、水王がシャム屋形に使者を出し、山王との和睦を申し入れた。1722 年（2 番暹邏船）の報告ではこの和睦が整い、1720 年に山王をカンボジアに送ったというが、1723 年（12 番柬埔寨船）の報告では水王が 1 人でカンボジアを平穩に治めており、山王は 1722 年にシャムで病死したという。²⁴⁾

カンボジア年代記によると、1714 年にエムは、リエウ人とユオン人を動かして東岸の諸地方を押さえると共に、ウドン王宮を包囲した。トワマ・リエチエ王はバットンバン経由でシャムに脱出し、代わりにエムが即位した[3: 511-515]。『寔録前編』巻七[31: 25-26]によると、1705 年から深（トワマ・リエチエ）と淹が争い、深がシャムに援軍を頼み、淹は嘉定に走って援軍を求めた。嘉定の兵は深を攻め、岑溪でシャム軍に遭遇して撃破した。深と弟匿新（トン）はシャムに逃げ、淹は羅壁城（ロンヴェーク）に帰った。同じく巻八[31: 12, 19-21]によれば、1711 年に匿深はシャムから帰国し、屋牙官高羅欽と謀って匿淹を殺そうとした。匿淹は哀牢人匿吹盆を使者にして鎮辺に報告させ、救援を求めた。1714 年にも匿深と匿淹の戦闘が起こり、1715 年に匿深が羅壁城でベトナム軍に包囲され、城に火を放って逃げ出し、匿秋も氷水塔に逃げたという。

カンボジア年代記と『大南寔録前編』では、ロンヴェーク＝ウドン周辺が戦場となっている。さらに『華夷変態』の記述を見ると、シャムとベトナムはそれぞれ「国境」まで出兵し、直接に対峙している。また 1718 年に暹邏船が廣南の海上を通ったとき攻撃されたことから、この事件は、ウドン王権の帰属を巡る、シャムとベトナムの直接戦争に転換していたということができる。スレイ・サントー勢力が消滅した後、王統としての「山王」と「水王」が、ベトナムとシャムのカンボジアを巡る対立の看板として残されたのであろう。

V-5 小 括

17 世紀末～18 世紀初頭、カンボジアには 2 王が立って相争った。従来、これはシャム派、ベトナム派の王族の権力争いと捉えられてきた。しかし、それぞれの権力基盤は、トンレ・サープ西岸対メコン東岸という、16 世紀以来の対立軸の上に乗っていた。すなわち、17 世紀後半の段階では、メコン水系を掌握するスレイ・サントーが、「水王」として、「山王」ウドンに対して独自の勢力圏を維持し得たのである。「水王」ノーンがスレイ・サントーに自立した時期は、中国船の来航が増え、メコン河口港ミト Mytho と商都プノンペンを接続する、メコン河下流部の重要性が増した時期でもあった。事実ノーンは、メコン河口地域に入植した中国人勢力と結んだ。

24) 年代記にトワマ・リエチエ死亡の記述はない。

ノーンの死後、メコン河口の中国人たちはベトナムの勢力下に完全に組み込まれた。スレイ・サントー勢力は消滅し、王統としての「山王」と「水王」を支援するという形で、シャムとベトナムが直接対立するようになる。

ま と め

年代記の記述には、14世紀末から17世紀末にかけて、スレイ・サントーに自立した王たちが数人現れる。そのうち、①14世紀末の「巴山王」、②16世紀末のアナカパラン、③17世紀末の「二王」あるいは「水王」は、外国の史料によって、存在が確認できる王たちである。従って、スレイ・サントー地域には、断続的であったかもしれないが、ロンヴェーク＝ウドンとは別の王権が存在したことは明らかである。そして、スレイ・サントー王権の存立基盤となったのは、メコン河とそのバイパスであるトンレ・トーチ河に拠った、スレイ・サントー地方の地理的条件であったと考えられる。すなわち、16世紀後半のスレイ・サントーは、メコン河を介して、ラオ人とチャーム・マレー人、中国人、スペイン・ポルトガル人を結び付ける中継点として、独自の勢力圏を打ちたてることができた。17世紀後半には、メコン河口に入植した中国人勢力と結ぶことによって、ウドンの王権に対抗した。これらスレイ・サントーに立った王権は明らかに単一の王統ではないが、大魚の腹から現れ、ナーガに守護されたスダチ・コーンの伝承は、メコンの支配者としての歴代スレイ・サントー王権を象徴するものといえるのではなかろうか。

スレイ・サントー王権は、17世紀末のアン・ノーンの死をもって消滅し、二度と復活しない。その事由として考えられるのは、メコン水系へのベトナムの進出である。ウドンの王権が、トンレ・サーブ南西岸域とシャム湾岸の海港を確保し、19世紀まで存続できたのに対し、スレイ・サントーは、メコン河の上流部も河口部も、自らの勢力圏として確保することができなかった。そのため、スレイ・サントーの王たちは、ロンヴェーク＝ウドンの王統が編纂した年代記の中で、一時的な反乱の首謀者、あるいは王位篡奪者の地位に甘んずることとなったのであろう。

参 考 文 献

1. L'Administrateur-Résident. 1907. *Monographie de la circonscription résidentielle de Kompong-Cham*. Saigon.
2. Aymonier, Etienne. 1900. *Le Cambodge*. Tome 1. Paris.
3. Brah Raj Bansavatar Mahakhsatr Khmaer. (東洋文庫内ユネスコ東アジア文化研究センター所蔵マイクロフィルム)
4. Brah Raj Bansavatar. (タイ国立図書館所蔵写本)
5. Cabaton, Antoine tr. 1914. *Brève et véridique relation des événements du Cambodge par Gabriel*

- Quiroga de San Antonio*. Paris.
6. Choisy, L'Abbe de. 1687. *Journal du voyage de Siam fait en 1685 & 1686*. Seconde Edition. Paris.
 7. Garnier, Francis. 1871-72. Chronique royale du Cambodge. *JA* 18 (67): 336-385; 20 (2): 249-289.
 8. Groslier, Bernard Philippe. 1958. *Angkor et le Cambodge au XVIe siècle d'après les sources portugaises et espagnoles*. Paris.
 9. Khin Sok. 1988. *Chroniques royales du Cambodge: De Bañ Yat à la prise de Lanvaek*. Paris.
 10. Lewitz, Saveros. 1967. La toponymie khmère. *BEFEO* 53 (2): 375-451.
 11. Liste des dépendances des circonscriptions. EFEO 所蔵写本 P.144.
 12. Mak Phoeun. 1981. *Chroniques royales du Cambodge: De 1594 à 1677*. Paris.
 13. Mak Phoeun & Po Dharma. 1984. La première intervention militaire vietnamienne au Cambodge (1658-1659). *BEFEO* 73: 285-318.
 14. ———. 1988. La deuxième intervention militaire vietnamienne au Cambodge (1673-1679). *BEFEO* 77: 229-262.
 15. Mak Phoeun. 1995. *Histoire du Cambodge de la fin du XVIe siècle au début du XVIIIe*. Paris.
 16. *Monographie de la province de Kratié*. 1908. Saigon.
 17. Moura, Jean. 1883. *Le royaume du Cambodge*. Tome 2. Paris.
 18. Peyrusset, E. 1880. Le chemin de fer de Saigon à Pnom-Penh. *Excursions et Reconnaissances* 2 (3): 119-234.
 19. Porée-Maspero, Eveline. 1961. Traditions orales de Pursat et de Kampot. *Artibus Asiae* 24: 394-398.
 20. Treng Nghea. 1973. *Pravattisastr Khmaer*. Phnom Penh.
 21. Vickery, Michael. 1977. The 2/k. 125 Fragment, A Lost Chronicle of Ayutthaya. *JSS* 65 (1): 1-80.
 22. ———. 1977. *Cambodia after Angkor: The Chronicular Evidence for the Fourteenth to Sixteenth Centuries*. Ann Arbor.
 23. Wolters, O. W. 1966. The Khmer King at Basan (1371-3) and the Restoration of the Cambodian Chronology during the Fourteenth and Fifteenth Centuries. *AM* 12 (1): 44-89.
 24. 岩生成一. 1966. 『南洋日本町の研究』東京：岩波書店.
 25. クルス, ガスパール・ダ. 1987. 『十六世紀華南事物誌』日埜博司 (訳). 東京：明石書店.
 26. 林 春勝; 林 信篤 (編). 1959. 『華夷変態』上・中・下冊. 東京：東洋文庫.
 27. 久光由美子. 1975. 「17 世紀におけるカンボジアと阮氏ヴェトナムの接触について——カンボジア年代記を中心として」『南島史学』6: 26-39.
 28. ———. 1975. 「カンボジア・ソル王(1675-1715 在位) 時代の国際関係」『お茶の水史学』19: 20-28.
 29. 藤原利一郎. 1986. 『東南アジア史の研究』京都：法蔵館.
 30. モルガ, アントニオ・デ. 1966. 『フィリピン諸島誌』大航海時代叢書 7. 神吉敬三; 箭内賢次 (訳). 東京：岩波書店.
 31. 『大南寔録前編』. 1961. 東京：慶応義塾大学語学研究所.